

私の戦争体験 戦後50周年に寄せて

筑紫野市 宮本 順子

昭和16年12月8日太平洋戦争の火蓋はきられた。私は大連日本橋小学校の3年生でした。次々と日本軍は占領していった。シンガポール陥落。旗行列、私達は軍歌の鳴り響く中、日の丸の旗を振り街を行進しました。

各家庭には、ひとときのやすらぎを求め、兵隊さん達が泊っていました。故郷には父母、兄弟、妻子を残してきた写真を見せてもらいました。母は、おいしい物を作り、喜ばせていました。戦場に向う兵隊さんの顔は、神々しく見えました。私達も国のため千人針を持ち街頭に立ち、慰問袋を作り、あきかんを集め、長刀を習い、庭にはひまし油の種をまき油を取りました。遠い野原に行き、軍馬に食べさせる草を刈り、それを干し、学校に持って行きました。小学生の私達は、国のため従事し、一生けんめいでした。軍隊式で並ぶのも号令、歩くのも歩調を揃え、大連旅順迄歩き、旅大突破もしました。胸には名札、血液型を付けていました。戦いは激しくなり若者は学徒動員が命ぜられ、神風特攻隊にかり出され、今の中学生くらいだったでしょうか、親子の別れ、悲しみ、一生懸命耐えている姿、脳裏に焼きついています。

私は近所の男の子を大連駅に送りに行きました。出征兵士でごったがえしていました。親は子にすぎり、別れを惜しみ、国のため特攻隊に行かなければなりません。帰りの燃料は飛行機には積んではくれないのです。飛行機もろとも、太平洋の海に散って行った幼い童顔の抜け切らぬ勇士達、どんな気持で行ったのでしょうか。今の私達子供達にできるのでしょうか。軍服姿にタスキをかけ、この世で最後に見せたあの後姿、私達はけっして忘れてはならないのです。二度と戦争はしないで下さい。思い出すたび泣きました。

戦火はそこ迄きました。窓には紙をはり、防空ごうを掘り、綿帽子をかぶり、救急袋をさげ中には勉強の本、焼おにぎり、カンヅメ、カンパン、クスリ、色々入れていました。B29が飛んできてバリバリいわせ、流れ弾が落ち、夜は黒のカーテンを引き、はだか電灯には黒の袋をかぶせ、下の明かりは、お茶わんくらいの明るさで勉強しました。私は二の宮金次郎の本が好きでした。芝刈り、なわなひ、わらじを作りかまどの火の明かりで勉強した金次郎を思い出していました。夜サイレンが鳴ると、母は外に飛び出し、「空襲警報、明かりがもれてますよ」、母の声が遠くで聞えていました。

戦いのカスリモンペの綿帽子 りりしき母の声ぞ聞こゆる。

夏は母の絹の着物がモンペに、冬は父の袴がモンペに作り替られ、街は黒一色に塗りつぶされました。連日、学校に着くとサイレンが鳴り響き、私は6年生の班長でした。泣き叫ぶ1年生の手を引き、雪で凍りつるつるした道路をこけながら、泣きながら帰った思い出があります。

まもなく、女学校に上ると避難訓練、バケツリレー学徒動員ばかりでした。

昭和20年8月終戦、陛下のお言葉をラジオで聞き、日本人は皆涙しました。ソ連兵の上陸、お姉さん達は頭を刈上げにし、男の服を着ていました。夜は押入で寝ました。兵士の入替で落

ち着きを取りもどし、私達は持っている物も全部売りつくし、生きて行くには働かなければなりません。お金は赤、青の軍票でした。近くに大連ドツグがありました。朝働きに行く人々が何百人か通るので、母が味御飯のおにぎりを作り、私が街頭で売っていました。お茶のサービスもしました。町内の方も、タバコ、ピーナツ、おもちなど売っていました。

体が弱っていた父は、家の中のことをしてました。父は水上警察に勤めていました。私は日本の警察がきらいでした。父は中国人を可愛がって家に連れてきていました。食料がない時、中国の人達が、コウリヤンやまんとうを持ってきてくれました。父は喜んでいました。泣けばまつげが凍るくらい寒いのです。ペチカやストーブをたく石炭もありません。ベランダをこわし燃やしたので中国人に連行されました。母が留守だったので、近所のおばさん達10人くらいにまじり私は父の大きなげたをはいていました。何が何だかわからず、カランコロんいわせながら、30分くらい歩いたのでしょうか、連れてこられたのは留置所でした。びっくりしました。おばさん達はあわてておろおろしていましたが、私を守る様に取り囲んでいました。私はふと安心感を覚えました。中国の警察が優しくほほえんでいたから、あのほほえみがなかったら泣いていたでしょう。夜は寒いので上に着る物を貸してくれました。食事はおばさん達にあげました。翌日母達が血相を変え、上衣や、靴を持って迎えに来ました。

ほっとしました。

いよいよ引揚1週間前2月8日、体が弱っていた父は日本へ帰ることができませんでした。隣組のおじさん達がリヤカーに乗せ、高い山の上に連れて行きました。「深く掘って犬が食べないようにしてるから心配なくていいよ」と言って私の頭をなでていました。母は泣きふしていました。私は母の後に立ち南の空を見ていました。

大連の土となりにし我が父よ涙して祈る南山脈

私の家に川村さんと言うおじさんが下宿していました。引揚者の係をして色々お世話して下さいました。有難うございました。2月16日収容所入り、リュックを背負い、落花生を水筒につめ、次の引揚を待つ人々を後に、別れを惜しみ泣きながら家を後にしました。

2月22日大連の港には、7000tの明優丸が待っていました。血が騒ぐとはあの時のことを言うのでしょうか、すぐ上船しました。上船して嬉しかったのは、お米の御飯と塩水のお風呂でした。有難いと思いました。船酔が3日続き、苦しみました。死人ができれば水葬です。1週間くらい船の中だったと思います。「上に上っていいですよー」声がありました。私はかけ上りました。「どこの港ですかー」「佐世保の港ですよー」わあ～2月なのに何でこんなに暖いのかしら、あっちは外でスケートができるのに、不思議でした。「朝もやにかすむ本土の暖かさ、涙…何だの人の合掌」嬉しくて嬉しくて、16才の私は船の上を飛び回りました。

3月3日多くの方々皆様のおかげで無事に引揚げてこられたこと、心より感謝御礼申し上げます。父の故郷山口県大島に、母と二人御参りに行きました。父は60才の人生でした。命日には好物の御酒を忘れた日はありません。母は91才、父の分迄生き、私をはげまし手を引き、連れて帰ってきてくれた。故母に。

祝。乾杯。